

第 7 回 子どもと大人の川とまちの寄り合い会議

NPO 法人 子どもと川とまちのフォーラム

理事長 井手 慎司

京都府

<第 7 回 川とまちの寄り合い会議>

川を感じる～みんなの感覚ってどんな感覚?～

開催日時: 平成20年 3月16日 10時～17時

実施場所: コーブイン京都(京都市中京区柳馬場蛸薬師上ル井筒屋町 411)

参加者: 78名(子ども30名 大人48名)

参加費: 無料(大人は、活動協力金としての資料代 500 円、交流会費別途)

対象年齢: 小学校 4 年生～大人

形態: 子どもたちの発表 子ども寄り合い会議 子どもと大人の寄り合い会議

主催: NPO 法人 子どもと川とまちのフォーラム

以下の助成を受けての開催:

財団法人 河川環境管理財団河川整備基金/公益信託 タカラハーモニストファン

協賛: 賀茂豆腐 近喜

後援:

文部科学省、環境省、農林水産省近畿農政局、国土交通省近畿地方整備局、京都府、京都市、大阪府、滋賀県、京都府教育委員会、京都市教育委員会、独立行政法人水資源機構関西支社、財団法人リバーフロント整備センター、財団法人河川環境管理財団、財団法人琵琶湖淀川水質保全機構、NPO法人日本水フォーラム事務局

賛同:

水と文化研究会/びわ湖自然環境ネットワーク/湖沼ネット/有栖川を考える会/西新道錦商店街/出町ホテルの会/京町家作事組/京都河川美化団体連合会/財団法人 萬世協会 麦の家/(財)日本野鳥の会京都支部/AR-NET(岡山)/(財)水俣病センター相思社/蒲生野考現倶楽部/NPO 法人吉野川みんなの会/やまのたろかわのたろの会/みんなであつこう最上川環境マップ/北海道沙流川を守る会/緑の地球ネットワーク/京都環境アクションネットワーク/京町家情報センター/琵琶湖・淀川水系を考える会/淀川ネイチャークラブ/カッパ研究会/近木川流域自然大学研究会/白川源流と疎水を美しくする会/西淀川自然文化協会/淀・納所桂川愛護会・・・(予定順不同)

<開催趣旨>

第3回世界水フォーラムをきっかけにスタートした「子どもと川とまちのフォーラム」は、流域と地域のコミュニティの再生を目的とし、「それぞれの私の流域」をテーマに自らが考え、活動している子どもたちと、川や流域に関係する行政や機関に属する多分野の大人たち、専門家および地域の人々との連携・ネットワークにより成り立っています。

車座形式の会議の開催は、今回で7回目となりました。この会議はフォーラムの活動の一年の節目としても位置づけており、日頃の川歩きや学習会、話し合いを通して、自身が感じたことや考えたことを子どもたちが表現する場でもあります。大切な成長過程にある子どもたちの言葉には、素直で本質的な思いが表れます。全ての世代、地域住民、河川管理者など、流域に関わる大人たちに投げかけられる子どもたちからの質問や声には、大人たちを素直な気持ちに変える力と、強い共感と気づきを生むメッセージ性があります。同時に、発信する側の子どもたちにとっては、それぞれの活動の振り返りと自分たちの意見を現場で活躍する大人たちが受け止めてくれたという手応えともなり、次の学びと活動への

意欲と自信に繋がっています。

今回のメインテーマは、「川を感じる～みんなの感覚ってどんな感覚?～」です。子どもたち自らが考えたもので「心」のテーマにもおおよび始めています。皆さんとそれぞれの川とまちを再認識し、互いの理解を深めたいと考えています。

<報告概要>

午前中の子どもたちの発表では、滋賀県の活動団体「伯母Q五郎」の子どもたちからは、身近な川での活動を通して、川への関心が高まっていった経験から、身近なことに関心を持つことが豊かな環境を守ることに繋がるとのメッセージが伝えられました。また、フォーラムの子どもたちからは、日頃の川歩きの体験から、子どもたちの視点から感じた川の「いいところ、嫌なところ」などから、それぞれの川への想いが伝えられました。

午後の会議では、「川を感じる」をテーマに、午前中の発表やグループ話し合い結果をもとに、子どもたちの話し合い、子どもと大人の話し合いを持ちました。

今回も、全体の司会進行、各会議のコーディネーターは、中・高生が担い、国、府、市の河川、教育行政の主要な役職の方々、流域の活動団体の方々にもご参加頂き、子どもたちとの意見交流の場ともなったこと、また、子どもたちにとっては、社会との接点の場となったことは、大きな成果であったと考えます。

<プログラム>

全体司会進行：栗木千明（中学2年生）

（子どもたちの学年は、開催時のものです。）

- | | |
|---------------|---|
| 10時～10時50分 | 子どもたちの発表 |
| 11時～12時 | 子どもグループ話し合い（1時間） |
| 13時10分～14時15分 | 子ども全体での寄り合い会議（1時間）
テーマ：「川を感じる～みんなの感覚ってどんな感覚?～」
子ども会議コーディネーター：東出一真・三谷貴大（中学1年生） |
| 14時30分～17時 | 子どもと大人の寄り合い会議（2時間）
テーマ：「川を感じる～みんなの感覚ってどんな感覚?～」
子どもと川とまちのフォーラムの子どもメンバーと、現場の行政、教育関係者などが一重円、二重円以降に、一般参加者の子ども、大人、子どもと大人会議コーディネーター：三谷英里（高校1年生）
大人一重円参加者：（肩書き等は、開催時のものです。）
国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所 吉田延雄さん
京都府土木建築部理事 森吉尚さん
京都市建設局水と緑環境部部長 芹田彰さん
京都市教育委員会生涯学習部部長 藤田裕之さん
全体での感想など |
| 17時30分～19時 | 子どもと大人の交流会 |

◆第一部：子どもたちの発表（10:10-10:50）

最初に、当日の総合司会である栗木千明さん（京都市立朱雀中学校2年）から開会のあいさつがあり、続いて、子どもたちによる発表がはじまった。



【伯母Q五郎～伯母川研究こどもエコクラブ～】



一組日は、滋賀県草津市の伯母Q五郎の4人の子どもたち。（敬称略）草津市立笠縫東小学校の荒居日和（5年）、梅影奈々（5年）、辻佳奈（5年）、中野木湖（5年）。

「私たちの住んでいる草津市には伯母川という川が流れています。伯母川は、三面コンクリートのどこにでもある普通の川ですが、実際に入ってみると、生き物がたくさんいて自然の豊かな川です。」

伯母川を研究するために5年前、私たちの先輩が伯母Q五郎というエコクラブをつくりました。私たちの活動の目的は、伯母川のすばらしさを見つけて、地域の人たちにそのすばらしさを伝えていくことです。

活動としては毎年、伯母川の源流から琵琶湖まで2日に分けて歩き、バックテストや透視度計を使って、水の汚れ具合を調べています。これまで、伯母川の15地点以上で調査をしてきました。伯母川以外にも、草津川や城池などの決まった場所で毎月水質を調べています。生き物調査についても、伯母川の様々な地点で20回以上行ってきました。

私たちは、伯母川が流れ込んでいる琵琶湖でも、ヨシを植えたり、ニゴロブナの赤ちゃんを放流したり、伝統的な漁を体験したり、漁船に乗って水質を調べたり、水鳥の観察をしてきました。また、淀川の学習会にも参加して、水質やワンドの生き物を調べたりしました。京都の平安神宮の池の魚調べもしました。

発見した伯母川のすばらしさは、公民館や琵琶湖博物館に伯母川博物館をつくって紹介しています。また、滋賀県内の交流会はもちろん、国内の様々な交流会で活動紹介をしてきました。

でも、それ以上に伯母Q五郎が大事にしていることは、自然の中に足を運んでもらい、自然の楽しさを実際に体験してもらうことです。そのために毎年、『伯母川探検隊』というイベントを開催して、私たちが伯母川を案内しています。また、3年前からは『草津お魚マッププロジェクト』という活動を始めています。2年かけて13の草津市内の川の調査が終わり、今年はさらに7つの川の魚調査を行いました。魚調査の結果は近々、魚マップとして発表する予定です。

もう一つ力を入れていることが『こどもラムサール交流会』です。こどもラムサール交流会は、国内でラムサール条約に登録されている湿地で活動する子どもたちの交流会です。これからも、全国の子どもたちとの交流を深めていきたいと考えています。

活動を始めてみると伯母川は、生き物がたくさんいて、豊かな自然が残っているすごい川でした。また、地域の人々だけでなく、日本全国あるいは世界の子どもたちとの交流を

生んでくれた素晴らしい川です。様々な交流を通してわかったことは、全国には環境を守るために立ち上がっている子どもたちがいっぱいいるということです。これからも、そんな子どもたちと力を合わせて自然を守っていききたいです」

【子どもと川とまちのフォーラム】

次に、子どもと川とまちのフォーラムの子どもたちから、これまでの川歩きの中で感じた「感覚」について話し合った結果の発表があった。発表は次の10人から。(敬称略)栗木千明、辻開斗(京都市立伏見住吉小学校4年)、高木千裕(京都市立朱雀第四小学校5年)、東出夢叶(朱雀第四小学校5年)、三谷貴大(京都市立梅津中学校1年)、東出一真(京都市立西ノ京中学校1年)、坂口雅和(西ノ京中学校1年)、松井三月(西ノ京中学校1年)、木村美里(京都市立太秦小学校6年)、木村昂起(太秦小学校4年)。



まず、リーダーの栗木さんから「私たちは今までたくさんの川を歩いてきました。その時に感じた感覚について、みんなで話し合ったところ、感覚を『良い川』と『悪い川』という二つに、さらに『良い川』の感覚でも、『生き物』『発見』『風景』などの細かい項目に分けることができました」と説明があり、続いて、項目ごとの感覚について、子どもたちから発表があった。

「生き物」としては「大きくて、きれいな魚がいっぱいいる川」や「たくさんの生き物がいて、周りに自然もたくさんある川なら、みんなが楽しく遊べるから良い川」。また「発見」としては「知らないことを発見できる川」が、「景色風景」については「高鼻川のように、季節の移り変わりが見られる川」が良い川。

「人」については「コンクリートで固めてしまった川など、人が住みやすいようにだけ作られている川は、生き物たちが棲みにくいのでよくない。でも、自然のままだと、人間に危険があったりするので、共生も考えないといけないし……」

「行きたい川」としては「高鼻川とか花脊の川のように、自然があって、一度行ったらもう一回行きたくなるような、心が和む川に行きたい」。一方、「行きたくない川」としては「ほとんどコンクリートでできている川」「工場排水で汚れている川」「自然の少ない川」「生き物があまりいない川」「人間がアピールするためだけに、きれいにしている川」

最後に、子どもたちひとり一人がそれぞれの理想の川について発表した。「生き物も人間も、みんなが遊べて楽しめる川」「いつでも行けたらいいなって思える川」「洪水が起きても、ダムとかがあってみんなが安心できる川」「生き物がたくさんいる川」「自然がいっぱいある川」「自然や生き物と触れ合える川」「季節の移り変わりが見られる川」「山の中にある川」「きれいで落ち着くことができる川」「素の自分を出せる川」「一度行ったら忘れられない川」「静かな川」「入ると、みんなが笑顔になれるような川」

中には「昔は魚がいっぱいて、遊べて楽しかったって聞くけど、今は遊ぶ人も全然いひんし、魚もいないので、昔みたいにしたい」といった発言も。

最後に栗木さんが「今みんなが言ってくれた理想の川に少しでも近づけるように、これ

からも活動を進めていきたいと思います」と締めくくって、発表は終わった。

その後、当日参加している子どもたち一人ひとりから自己紹介があり、第一部は終了した。発表に加わっていなかったその他の子どもたちは次のとおり。(敬称略)

京都市立朱雀第四小学校からは、林千明(6年)、大塚友里菜(6年)、青木瞭子(5年)、井上結衣(5年)、国近めぐみ(5年)、荒尾昂宏(6年)、夏山綾純(6年)、西村雄介(6年)、木村香穂(6年)、松井友里(6年)。京都市立洛水中学校からは、上田晋也(1年)、梶村爽太(1年)。京都市立納所小学校からは、梶村紅葉(4年)、梶村恵矢(2年)。

また、子どもスタッフとしては、三谷英里(京都市立堀川高校 1年)、北川あゆ(元フォーラム子どもメンバー)、林友紀(元フォーラム子どもメンバー)、前川洋志(元フォーラム子どもメンバー)。

◆第二部：グループ討論(11:00-12:00)

休憩の後、子どもたちは3つのグループ(A、B、C)に分かれ、グループで議論した。



◆第三部：子ども寄り合い会議(13:10-14:15)

昼食をはさんで「子ども寄り合い会議」がはじまった。司会は栗木さん。最初に、午前中のグループ討論の結果の発表が各グループのリーダーからあった。

東出くん「Aグループでは最初、生き物について話し合いました。色々な種類の生き物がいたら楽しい、人も生き物もすみやすくできたらうれしい、発見することは楽しいなどの意見がでました。

次に、ゴミについて話し合いました。ゴミがあったら気持ちが悪い、川に入りたくないなどの意見が多かったです。そこで、川がきれいになるように家庭で工夫して、生活排水を出さないようにしようという意見もでました。ゴミを少なくすると生き物もふえるので、そこにつながりがあることを発見できました。

理想の川ということでは、水質がよく、水が透きとおっていても、生き物や川の周りに植物がいなかったらよくないので、バランスが大切という意見がでました。

そして最後に、理想の川に近づくためには、生き物と触れ合う体験をすることや、自分が調べたことを他の人に伝えること、みんなで楽しむこと、ひとり一人が考えて生活排水を流さないよう努力していくことが大切だという意見がでました」

三谷くん「Bグループでは最初に、理想の川について話し合いました。ホテルがある川や、

みんなが楽しく遊べる川、人も生き物も安心できるような川が理想の川だという意見がでました。

次に、川歩きに行って楽しかったことをポストイットに書きました。すると、生き物と触れ合えたこと、周りの風景がきれいだったこと、ゴミが少なかったこと、みんなで川に入ったこと、自分の知らない魚や鳥に出会えたこと、川によって色々な違いを発見できたこと、などの意見がでました。

また、『どんな川がいい？』という話題で話し合ったところ、生き物がたくさんいる川、みんなで遊べる川、自然があふれている川などが良い川という意見がでました。

最後にみんなで、未来にこんな川があったらという理想の川の絵を描いて、絵の余白に、こんな川があったらいい、こんな川を残したいなあと思うことを書いてもらいました。すると、自然も生き物もたくさんいる川、楽しく過ごせる川、自然と人が共生できる川を残していきたい。地球に優しい川をつくっていきたい。ゴミのない、きれいな川、人間も生き物も安心して、落ち着いて過ごせる川、人の笑顔が絶えず溢れる川が良いなどの意見がでました。

これからみんなで、こんな理想の川をつくっていきたいです」

栗木さん「Cグループではまず、マイリバーの好きなところを聞きました。

すると、紙屋川では、人と自然の共生ができる、犬も飛び込める、ホテルが少しずつ戻ってきた、水の中に入ることができる。伯母川では、生き物を大切にしなければならないことを教えてくれた、人と人との交流を生んでくれた、これからはずっと自分の宝物であり続ける川。鞍馬川では、食物連鎖が直に見られる、自然と人工がほどよく釣り合っている。高鼻川では、もう一度行きたい、自然の声が聞こえる、空気や川の水がとてもおいしい。葉山川では、魚や鳥、植物などのマップを作ることができて、とても楽しかったなどの意見がでました。

改善しなければならない点では、紙屋川では、ゴミをほかにしている人がいるということ。

鞍馬川では、大きな生き物があんまりいないこと。伯母川と葉山川では、外来魚がもともといた魚をたべてしまう問題などがでました。

次に、いま取り組んでいることとして、紙屋川では、低学年に紙屋川ゴミ0隊への参加を呼びかけている。伯母川では、家庭からの汚い水をできるだけ流さないようにしている。高鼻川では、川歩きをした時のゴミを持ち帰るようにしている。葉山川では、外来魚が獲れたら回収ボックスに入れているなどの取り組みが行われていました。

最後に、これからやっていきたい取り組みとして、紙屋川では、ゴミ0隊にもっとたくさんの地域の人が参加してもらいたい。高鼻川と伯母川では、地域の人々にこれらの川のよさをもっと知ってもらいたい。鞍馬川では、外来魚がいないようにしてほしい。葉山川は、鳥や魚がいっぱいいる川にしたいという意見が出てきました。

これからしていきたい取り組みや、いまやっている取り組みをもっと増やせば、良い川が作れるんじゃないかと思いました」

続いて、子ども寄り合い会議がはじまった。コーディネーターは東出一真さんと三谷貴大くん。一重円に座ったのは次のような子どもたち。(敬称略)辻開斗、荒居日和、梅影奈々、



最初に、各グループの発表に関しての感想があった。
「Bグループの理想の川の絵は、みんなの思いが詰まっ
ていて、とてもいい工夫だと思った」「みんなの川をきれ
いにしたい気持ちとか、川の楽しいところがよくわかっ
た」「グループによってまとめ方は違うけど、考えている
ことはほとんど同じだということがわかった」「理想の川
に近づけられるように、普段の生活から工夫していきな
いと思った」



続いて、いやな川、行きたくない川について話し合ったところ、「たくさんゴミが落ちて
いる川」「生き物がぜんぜんいない川」「人間の手が加わった、コンクリートだらけの川」
「家庭排水が入ってきていたり、有害な物質が流れていたりする川」「油や泡が浮いている
川」「外国からの植物がたくさん生えている川」などの意見がでた。

これに対して、松居さんから「でも、いやな川の始まりは人が原因なのだから、人間が
責任をもってなんとかしなければならぬと思う」。続いて、木村さんが「そのために、ど
んな活動ができると思いますか？」との質問。

子どもたちからでた意見は「洗剤の量など、川を汚してしまう身の回りにある原因をも
う一度見直していったらいい」「生活排水をなるべく川に流さないように、一人一人の工夫
が大切」「ペットボトルはゴミになるから、水筒をもっていかとか、必要なものだけを買う
とか」など。特に、洗剤が気になるらしく「私も、洗剤をどうにかしたいと思います」「僕
も、洗剤などを川に流すことはやめることはできないのかなって思いました」などの発言
が続いた。

次に、きれいな川については「透き通っていて、魚が泳いでいるのが見えて、水面がキ
ラキラ光っているような川」「いろいろな生き物が棲んでいる川」「水質はそんなにきれい
じゃなくても、周りにゴミとか落ちていなくて、自然がきれいだったら、川もきれいに見
える」「生き物が元気に泳いでいたり、気持ちよさそうにしていたら、そういう川はきれい
だと思う」

ここで、栗木さんが「どんなにきれいでも、人がいかなかったら、その川はさみしいと
思う。少しくらい汚くても、自分がいいと思ったら、どこか素敵などころをもった良い川
ではないか」と発言。それに次のような発言が続いた。「きれいな川は一人一人違うし、き
れいな川はいっぱいある」「昼と夜とで違いがわかる川がとてもきれい。昼は太陽の光とか
で水面がキラキラ光っていたり、魚が楽しそうに泳いでいたり、夜はホタルが光っていた
り」「周りの植物も大切だと思う。季節によって植物も変わるし、そういう川がきれい見

えるから」

また、これまでの発言の感想としては、荒居さんが「一人一人が自分の所に帰って行動して、良いなと思える川にもっと近づけたらいいなと思う」。林さんは「今日でたきれいな川の意見を、いま自分たちが活動している川と比べて、足りない所があったら、どういう風に直していけばいいのかを考えて活動していきたい」



最後に、東出くんが「この話し合いでは、楽しいことについては、自然や生き物と触れ合ったり、生き物を観察できたりすることが楽しいという意見が、逆に、いやな川としては、生活排水など、生き物に害を及ぼすものが流れていたり、コンクリートで固められていたり、外来種の生物がいたりなどしている川という意見がでました。それらはやっぱり人間がすべて関係しているから、改善していけるように、これから人間が努力していくことが大切だと思いました」と話し合いをまとめ、三谷くんが「この話し合いの中で、たくさんの人の意見や思いなどがよくわかってよかったです」と述べて、子どもの寄り合い会議は終了した。

◆第四部：子どもと大人の寄り合い会議（14:30-）

休憩をはさんで、午後の第二部である「子どもと大人の寄り合い会議」が始まった。コーディネーターは三谷英里さん。その他、一重円に座ったメンバーは次のような人たち。
（教務略）栗木千明、吉田延雄（淀川河川事務所所長）、荒居日和、梅影奈々、森吉尚（京都府土木建築部理事）、松井三月、東出夢叶、芹田彰（京都市建設局水と緑環境部部長）、大塚友里菜、荒尾昂宏、藤田裕之（京都市教育委員会生涯学習部部長）。



最初に一重円のメンバーの自己紹介があり、続いて、子ども会議について感想を求められた吉田氏から「自然の中でも川は一番身近な存在。川を楽しむと言うより、自分たちの生活が自然に生かされていると感じてもらいたい」。また、藤田氏からは「何が大切かは、立場によって変わってくる。その意味で、私たち人間が川をどう受け止めて、どう関わっていくのが大切なのだろう」と思いながら子どもたちの話を聞いていた



荒居さんと三谷さんからは「人間にとってコンクリートの川は便利だけど、魚にとっては棲みづらい」「生き物だけ、人間だけの目線では偏りがでてくるので、それぞれの立場に立って考えることが大切」との感想。

続いて、コンクリートについて意見を求められた森氏より「昔と比べて、これだけ人口が増えてくると、人間の活動と自然とを調和させることは大変。昔は、水を安全に流すために川を深くした。そうすると急流になるため、どうしてもコンクリートで固めないといけなかった。今は、できるだけコンクリートを使わないようにしているが、もとの自然にまでは戻らない。人間生活とのバランスを一生懸命考えているところ」。また、芹田氏からは「多孔質の護岸にしたり、できるだけ多自然型の川づくりに努めている。しかし、都会の人口がどんどん増え、田んぼが宅地になり、川に一気に水がでるようになった。安全を図るためにどうしてもコンクリートによる整備が必要だったのも事実。私たちの生活が、川を都会の中の唯一の身近な自然にしてきたことを知ってもらいたい」

ここで、三谷さんが「カンボジアに行ったとき、道がぬかるんでいて、コンクリートの道だったらいいのと思った。高鼻川の川歩きするときも、砂利道は疲れると思う自分がいた。コンクリートでなくても、そんなふうに、環境に悪いとわかっていても、それに頼っているような経験はない？」との質問。それに答えて、栗木さんが「私はお菓子づくりが



趣味。お菓子づくりには結構バターをつかう。水ではあんまり汚れが落ちないから、使ったらいけないと思いつつ、つつい洗剤を多めに使ってしまう」。これに対して、塚本氏は「意識して使うと、無意識でやっていたときの20分の1くらいの洗剤の量でも十分に汚れはとれる」。また、酒井氏は「汚れを紙でふき取ったり、皿を重ねないとか、少ない洗剤、少ない水で洗える工夫はいろいろある。それ

と、下水がどこの下水処理場に流れているのか、汚れた水の行き先を見極めることが大切」。荒居さんは「わたしのおじいちゃんは、生ゴミは田んぼに入れている。できるだけ自然に戻せたらいいと思う」

ここで芹田氏が「私の言い方がまずかったのか、コンクリートの話になってしまった。なぜ、都会の中で川に自然が見られるかという、それは水が生命を運んでくるから。今までは水を速く流すことばかり考えていたが、そこに棲む生き物や周りの自然などにも目を向けるようになってきたことを理解して欲しい。それと、市街地が増えて、田んぼなどがどんどん少なくなっている。そういった中で、身近な自然が川に追いやられてしまった。

そのことを、子どもたちが大人たちより先に理解している。私たちは仕事で川を見ているが、生き物は見ていない。そこが子どもたちとの違いだと思う」と発言。また、藤田氏が「堀川をきれいにしようと、子どもたちがペットボトルで作った街灯を川辺に夏に並べている。堀川にまた水を流そう、流れの中で魚が泳ぐことを夢見てやっておられる方々がいる。たとえコンクリートの川であっても、人々が関心を持つことで、人が集まるきっかけになる。コミュニティの再生のために、川はすごく大きな役割を果たしていると思う」



続いて会場の田子氏（桂川河川レンジャー）から「桂川を調査すると非常にたくさんの生き物がいる。桂川の川辺にだけ残っている種も多い。私が持っているのは、普通に桂川にある植物で『ガガイモ』という。実を開くと、綿毛がこんなふうに北風に乗って飛んでいく。しかし、こんな植物もコンクリートで固められると姿を消してしまう。こういう活動をやっている、どうしてもゴミも一緒に見えてくる。ゴミのない自然豊かな川を次の世代に遺したいということで、河川レンジャーとして活動している。観察会を年に何回かやっている、ぜひ参加して、自然の素晴らしさを体験してほしい」

ここで吉田氏が「桂川は川原が少ない。一方で、川の中に木が生えて森のようになっていく。昔の川は水が流れていて、川原があって、もっと単純だった。今は違う。生き物がいる川はおかしい。もともと山にいる鳥が棲む所がなくなって、川に下りてきていたりする。川の中は川らしい自然であるべき」と発言。これに対して、酒井氏は「川を改変してきたのは人間。森にいる生き物が川に来るのはおかしいと言うが、それは人間が森や自然を破壊してきたため。それを進めてきた政策が悪い」

ここまでの話を聞いていた感想として、松井さんと東出さんが「綿毛の出る種を見て、桂川に見に行きたい。面白い植物を見つけないかと思った」と発言。また、森氏より「失われた自然を回復すること、今まだ残っている良い自然を守っていくことは違う。後者は、すこし我慢すれば、できるかもしれないが、失ったものを回復するのは、さらに大きな努力が必要。ただし、そういうことに成功している例もでてきているので、できないことではない。自分たちの身近な自然の改善ということで、もっと色々工夫できる場所があると思う。そういったところも考えてもらいたい」

最後に三谷さんが「無視したら、嫌な川はずっと嫌な川のまま。誰かがその川について考えないといけない。意識する、感覚を忘れないことが大切。それと、たくさんの経験すること。自分の中に残る記憶とか感動を貯めておくことが、行動しなければならないときに役に立つと思う」とまとめて休憩に。

休憩をはさんで再開した会議でまず、栗木さんが「今の子どもたちは、川や生き物に関心がない。触れ合う楽しさを感じていないみたい。活動をどうやって広められるか意見を聞きたい」と質問。これに対して子どもたちからでた答えとしては「楽しさをアピールす

る」「自分たちの活動が役に立っていると言いながら誘っている」「友達と一緒に川に行つて、魚をとって遊んでいる」「話すだけではだめだけど、実際に川に入つて遊ぶと、興味をもってもらえて、また川に入ろうって言ってくれる」

また、子どもを募集する時の工夫として、会場の仁枝氏（桂川河川レンジャー）から「二年前から『納所探検』という四季折々の探検をしている。伏見区の納所には、洛南排水路という農業水路がある。昔は、子どもたちが遊んでいたが、今は荒れ果てて、ゴミだらけの川になっている。納所探検は、生き物を調べながら、ゴミの問題をみんなで考えてみませんかという仕掛け。感じるのが大事だとしたら、探検することが一番。それも、子どもたちだけでなく、大人を巻き込んで探検することが効果的だと思う」

ここで再び、コンクリートの話題となり、子どもたちから「コンクリートは使わざるを得ないと思うけど、強度が必要なところにだけ使ったり、生き物が棲みやすいように工夫してほしい」「できるだけ少ない量を使って、安全もあって生き物が棲めるような川がいい」「要はバランスの問題なのかも」との発言。

このとき会場の宮本氏から「なぜコンクリートを使わざるを得ないと思うか理由を聞かせて欲しい」と質問。これに対して、子どもたちからは「土の堤防だと、増水したときに地盤が緩んで崩れて洪水につながったりするから」「やっぱり土と比べると、コンクリートの方が頑丈で安全だと思うから」という答え。それを受けて再び宮本氏が「コンクリートのない昔は、石で頑丈な建物や城の石垣を造っていた。コンクリートが悪いというのも思い込みだし、コンクリートが必要だということの思い込み。なぜかと考えることが大切。そうなんだと思うことがあぶない。私が小さいとき、木津川に水泳場がいっぱいあった。潜ってみると、まっ白な砂がザァーって流れてくる。それがものすごくきれいだったという記憶がある。子どもたちにそんな感動を与えられないことが残念。感動が人を動かす、人を集める。大人は感受性が鈍くなっている。私にとって、子どもの会議はいつも新鮮。他のところで大人の会議をやっているけど、ぜひこの子どもたちに委員になってもらいたい」

次に、川づくりについてアイデアを求められた子どもたちからでた意見は「伯母川の上流に行った時に、川の周りに木がたくさん生えていて、木漏れ日がきれいだったことを憶えている。だから、もっと木や植物を植えて欲しい」「個人でこ



ういうグループに参加することはむずかしい。今の子どもは結構シャイ。学校での取り組みなら『しゃあないなあ』と思いつながりながら参加できる」「川の中に水中カメラを設置する。川に入らなくても魚が見られる」「川にしか棲んでいない生き物を増やせばいい」「石で魚の棲みかをつくる」「魚や鳥の写真を撮って、マップにする」など。

ここで会場の橋本氏（貝塚の近木川）から「近木川は二面張り。でも川底には昔のままの自然が残っている。それで、かわっぱの子どもたちが川底にきれいな粘土を見つけ、コップをつくって電気釜で焼いた。どんな川でもどこかいいところがある。川は自分で悪く

なったわけではない。いいところを見つけてあげたら、川はよくなる。70%の子どもたちは、学んできたことを家庭で話す。ラーメンの汁を流したらいけないとか。おかげで、近木川の水質は全国ワーストワンになったときは、BOD が 21 だったが、平成 18 年度の発表では 6.3 にまで下がった。子どもの活動で大人が目覚めるとのことだと思う。また、これを受けて三谷さんが「子どもの意見が川づくりに反映されたらうれしい。自分たちの意見に応えてくれる大人がいたら、やる気にもつながると思う」と発言。



続いて藤田氏から「取り組みを広げていくのはやはり大人の責任。子どもから学んで、自治会や PTA が地域で自主的に動かないといけない。また、朱四小など今日参加している学校は意識が高く、すばらしい活動をやっているが、そんな学校は少ないのが現状。もっと学校としての取り組みを広げていかないとけない。たとえば、そのために『みやこ子ども上陸塾』という取り組みなどをやっている。大人が子どもに知識を教えるのではなく、大人が子どもから学ぶ時代になってきていると思う」

また、意見を求められた会場の大西氏（有栖川を考える会）は「水は人の心の中を流れている。山紫水明という言葉がある。きれいな川には、きれいな水だけでなく森や林があることも大事な条件。また、資源ゴミを出すとき、きれいにしておそうとすると水を使わなければならない。そこにジレンマがある。自分の生活をもっと見つめなおさないといけない」と発言。また、吉田氏（淀大下津町）は「自分が小学生ぐらいのころ、桂川の河川敷から 150 束くらいのヨシを刈り取ってきて、円錐形に積み上げる行事があった。中に子どもが 10 人くらい入れるような空間ができる。みんなで作り上げて遊んだことを憶えている。今の子どもたちにも味わってもらいたいと思い、三年前に 40、50 年ぶりに復活させた。ところが今年は一人も子どもの参加者がなかった。どうも親たちが子どもの参加することをブロックしているようだ。どうしたら親たちが子どもたちにそんな経験をさせたいと思うか、子どもたちの視線からヒントが欲しい」

これに対して、三谷さんは「このフォーラムで活動している子どもの両親ならそんなことは言わない。問題は、フォーラムの存在自体を知らないような子どもたちとその親御さんたち。そんな子どもたちを巻き込むために、『とりあえず川に来てみつ』と誘うことが大切だと思う。今日の会議では、感覚というテーマで話し合ったが、初めは魚とか生き物の話、発見することが楽しいといった話がいろいろでた。その後、コンクリートの話も。コンクリートの話は、感覚と一見関係がないように思えるが、コンクリートについていいとか悪いとか、疑問だなあとか思っていること自体が感覚なのだと思う。最後に、一重円のみんなから今日の感想を聞きたい」

荒居さん「コンクリートについて、自然と両立できるようになったらいいなと思った」

梅影さん「自然に興味がない人は、自然の感覚があんまりないと思う。これからは友だちを誘って、もっと自然と仲



良くなっていきたい」

松井くん「コンクリートは悪いと『思い込んでる』っていう話がとても心に残った。この会議で大人の話聞いて、コンクリートにだっていい所があるし、必要な場所だってある。これからはもののいい所を見つけていきたい」

東出さん「コンクリートははじめ悪いとか思っていたけど、みんな生きていくにはコンクリートも必要だということがわかった」

大塚さん「人間と川はもっと共生していけると思う。これから生活していく上で、人間の目線ではなく、他の生きものの目線で生活していきたい」

荒尾くん「もっと環境やこのフォーラムのことに関心を持っていきたい」



吉田氏「毎回、みんながほんとによく考えていると感心する。ぜひ活動の輪を広げていってほしい。そのためにも楽しくないと。川に行くのがたのしくなるには、どうすればいいかを考えてもらいたい。ただし、行き過ぎは何事も良くないから、そこだけはよろしく」

栗木さん「吉田さんが言われたように、もっとみんなが川を楽しめる環境を作っていくことが大切。そのためには、子どもだけでなく、子どもを取り巻く環境も一緒に変えていかなければ。私も川へ行くことが楽しいことをちゃんと伝えられるようにがんばっていききたい」



森氏「今日は女の子がたくさん参加していて、女の子が、魚捕りとか、実体験に基づいて川を好きになってくれていることを、すごくうれしく思った。最近の子どもたちはなかなか外で遊ばない。きれい好き。そんな子どもたちが、自然や生き物との触れ合いが楽しい、あるいは好きだという気持ちを素直に出してくれている。子どもたちと一緒に考えていったらいい川ができるんじゃないかという思いを

抱いた。大人には、善良なる無関心な人が多く、もどかしい。一番大事なことは子どもの頃の体験。今日の皆さんの意見を参考に、もっと子どもたちに参加してもらえよう川づくりにがんばっていききたい」

芹田氏「川を感じるとは非常に難しいテーマ。川を見て何も感じない人もたくさんいる。なぜ感じるかという、その川がこうあってほしいとか、その川をよく知っているから。自然の豊かさというものは、午前中の伯母川の発表のように、調べてみてはじめてわかる。みなさんをお願いしたいのは、なぜあんな川になったんだろうという自分の感覚を大切にすること。江戸時代には、『水心を存知たるもの』といった水の心を知っている人たちが鴨川を守る仕事に従事していた。私たちも水心をわかるようになる努力をしていきたい」

藤田氏「マザーテレサに『愛情の反対は無関心だ』という言葉がある。川を愛し、地域を

愛するみなさんの思いを大切にしてほしい。今日の川を感じるというテーマが、自分には途中から『生命』という言葉に思えてきた。自分だけで生きてるんじゃなくて、様々なものの中で生きている。その中心に常に流れているのが川なんだろう。ぜひ、学校や地域のリーダーとして、この素晴らしい活動をがんばって続けてほしい」

三谷くん「安全だからコンクリートと思ってたけど、石垣もあるんだなと気づいた」
林さん「雨漏りをコンクリートで止めるのをテレビで見たことがある。コンクリートが身近なところで活躍していることも憶えておきたい」

また、会場からは、橋本氏が「子どもたちには自信をもって発言してもらいたい。川の立場にたっている川を考えた、コンクリートが良いか悪いか、その辺りに話がつながっていく。貝塚の子どもたちに十年後の近木川がどうなったらいいか書いてもらった。すると、桶や危ないという看板がなくなって自由に遊べる、大人になったら子どもと一緒に遊べる川という意見がたくさんでた。いい川とは何か、みなさんの豊かな五感で考えてもらった答えが出てくると思う」。酒井氏からは「戦後、国が発展して、生活は豊かになったけど、川はコンクリート化され、心から遠のいた。川はもともと溢れるもの。コンクリートでも防ぐことはできない」。田子氏は「数年前の台風23号のあくる年の春、河川敷に山の花がたくさん咲き、川と山がつながっていることを実感した。川は海につながり、海を通じて世界につながっている。自然を観察していると、毎年同じ所に同じ花が咲き、渡り鳥がやってくる。繰り返されることに価値がある。目先のことなく、50年先、100年先を考え、川を通じて、生活を見直していくことを考えてもらいたい」

また、小丸氏から「今日は本当にたくさん子どもたちが集まってくれたが、ギリギリまで人が集まるかどうかわからずヤキモキした。教育委員会からの紹介で十数校を回って会議への参加をお願いした。残念だったのは、家の人にダメと言われてたり、学校の都合がつかなかったり、子どもだけで来ることができずに今日この場に來られなかった子どもたちがたくさんいたということ。今日ここに集まった子どもたちは、少なくとも無関心な大人にはならないだろうという希望を持っている」。また、北川さんからは「考えてみると、今はゲームの中で魚が釣れたり、恋ができたりする時代。川も同じようなものと考えられているのかもしれない。自分はこのフォーラムに中学生のとき入ったけど、小学校の頃に入っていたらどれだけ幸せだったかと改めて思った。だからこそ、朱四小や伯母Qのみんなには、もっと川歩きに参加してほしい。フォーラムに遊びに来て下さい」

最後に、三谷さんが「これで大人と子どもの寄り合い会議を終わります。今日、発言して頂いた内容は報告書に載せさせていただきます。完成を楽しみに待っててください」と述べて、大人と子どもの寄り合い会議は終了した。

◆最後に

フォーラム理事長の井手氏より、あいさつがあった。

「アフリカにナクル湖という湖があり、シーズンには数百万羽のフラミンゴが集まる。遠

くから見ると、岸边に打ち寄せられた桜の花びらのようにきれい。でも近づくと、湖岸はフラミンゴの糞だらけ。吉良竜夫先生というえらい先生といったとき、その先生は、平気で湖岸に近づき、手で水をすくってペロっとなめられた。毒でも病原菌でも、なめるくらいの量なら大丈夫。それ以来、世界中の湖にいて、湖岸に近寄れるときは、かならず、水を手ですくって、なめてみるようにしている。

今日のみなさんの議論を聞いていて、気になったのが、水を感じる感覚が備っているのではないかということ。五感とは目、耳、鼻、口、皮膚で感じる。でも、今日の話で、目で見ることばたくさんできてきたけど、耳で聞く音や臭いや味の話はほとんどできてこなかったのでは。

今の時代、ゲームの中で魚も釣れるし、恋愛だってできる。でもゲームでは絶対できないことがある。それは、臭いをかぎ、味見し、触れること。友だちを連れて行ったら、川のよさをわかってもらえたという話があった。それは、実際に川に行ったことで、水の臭いとか肌にふれた感覚とか、そういったことに本物の感動があるからではないか。あまり勧めると怒られるが、なめるだけなら、どんな汚い水でも大丈夫だから、ぜひ今度、試してもらいたい。五感のすべてをつかって、水を感じてほしい」

最後に、栗木さんから「それでは、今年の寄り合い会議を終わらせて頂きます。ありがとうございました」との挨拶があり、寄り合い会議はすべて終了した。

